

日本伐木チャンピオンシップ in 青森 モヤヒルズで開催

「日本伐木チャンピオンシップ（JLC）in 青森」が、2014年5月11、12日の2日間、青森市のモヤヒルズで開催された。これはチェーンソーを使った伐木技術の世界大会「世界伐木チャンピオンシップ（WLC）」の国内予選となる競技大会で、今回が第1回目。本県の4人を含む8県・20人が参加、林業技術の正確性やスピードを競い合った。

その結果、総合1位の前田智広（青森県、銜前田林業）、2位の今井陽樹（群馬県、多野東部森林組合）、3位の秋田貢（青森県、青森県森林組合連合会）が日本代表としてWLCのプロフェッショナルクラスに出場することになった。24歳未満のジュニアクラスは参加者が一人のため自動的に先崎倫正（青森県、銜マル先崎林業）が日本代表となった。

大会は、「伐倒」「ソーチェーン丸太輪切り」「枝払い」の5種目で実施。丸太を切る際のミリ単位での正確性や速さ、安全に対する意識などを採点で審査した。2日目に行われた最後の競技となる「枝払い」では、その得点によって日本代表が決まるため、選手の表情には緊張が見られた。スタートの合図で、枝に見立てた丸棒が突き出る丸太に近づき、丸棒を切り落としていく。見事なチェーンソー捌きに観客から拍手が沸いた。

安全・正確・速さ競う



「伐倒」。倒す方向を狙い定めセンサーで「受け口」を付ける



「丸太合せ輪切り」。上下の切り口を合わせることが鍵

世界大会は40年以上の歴史を持ち、約30か国、100人超が参加している。近年は隔年で開催し、今年はスイスで行われる。日本大会は、全国森林組合連合会などをつくる実行委員会が主催。同連合会が世界大会の日本事務局として認定されたため日本大会を開催できるように

大会は、「伐倒」「ソーチェーン丸太輪切り」「枝払い」の5種目で実施。丸太を切る際のミリ単位での正確性や速さ、安全に対する意識などを採点で審査した。2日目に行われた最後の競技となる「枝払い」では、その得点によって日本代表が決まるため、選手の表情には緊張が見られた。スタートの合図で、枝に見立てた丸棒が突き出る丸太に近づき、丸棒を切り落としていく。見事なチェーンソー捌きに観客から拍手が沸いた。



枝に見立てた丸棒を切り落とす「枝払い」

総合3位に入賞した秋田貢氏は、これまで日本代表として2度世界大会に出場しているベテラン。3位の成績を不本意としながらも、「モヤヒルズで第1回目の日本大会が開かれたのをきっかけに、全国の山で働く人たちが、野球で甲子園を目指すように、サッカーでは花園を目指すように、林業ではモヤヒルズを目指すようになれば」と抱負を語り、世界大会での検討を誓った。

（写真提供／會津利幸氏）

すすめよう

木材の地域循環



NPO法人青森バイオマスエネルギー推進協議会
株式会社今井産業
ウッドラック
薪ストーブ愛好会 くべる部

青森バイオマスエネルギー 推進協議会



小田桐講師の講義に熱心に聞き入る参加者

「伐ることから始まるのが林業です。農業は植えることから始まりますが、林業は、育つた木を伐ることから始まります……」

受講生たちを前に、講師の小田桐久一郎氏が講義をする。NPO法人青森バイオマスエネルギー推進協議会（高橋博志理事長）主催の『実践的キコリ養成講座』第1日目は「チェーンソー取扱い座学」。今回で4回目をかぞえ、会場をそれまでの三沢市から青森市に変えて行われた（2014年9月）。

県内外から参加した受講生は18人。このうち女性は5人で、回を重ねるごとに女性が増え、増えている。大学生の兄と一緒に参加した高校2年生の女子は、「将来、林業に進むかどうか



真剣な面持ちでチェーンソーの実習に取り組む

はまだ決めていませんけど、興味があつたから」と照れた笑顔で話していた。

チェーンソーのカーリスマとして全国に知られる林材業安全技能師範の小田桐講師。熱烈的なファンが手ほどきを願って県外からも駆け付けける。小田桐氏からは座学で、日本の林業の実態や、なぜ間伐が必要なのかなどについて講義し、翌日の実習に向け

てチェーンソーの取り扱い方や注意点を説明。「安全」が第一、次に「素早く」。慣れた者ほど思わぬ怪我をする、常に危険が伴う仕事が林業なのだということを訴えた。

座学から始まり、伐倒や木材搬出の実習まで合計4日間わたる講座を受講すると「チェーンソー取扱技能特別教育修了証」が取得できる。それで

講座でチェンソー取扱修了書取得 個人がキコリとして山の間伐推進

木材伐採業者「キコリ」として仕事をすることができるようになる。

地域のエネルギーは地域でまかなおう——。これが、青森バイオマスエネルギー推進協議会が掲げる活動目標である。高

橋理事長は昨年(2013年)、ペレット製造プラントを三沢市の自社(株高橋)の敷地内に設置し、ペレットを製造・販売している。原料となる木をいかにして集めるか。高橋理事長は自伐林業方式に着目した。山



伐倒したスギを玉切りする



自伐林業に意欲を燃やす

主自ら木をチェンソーで伐採し、搬出し、販売する小規模な林業スタイルが自伐林業方式。一人でも始められ、大がかりな林業機械を導入しなくても良いため低コスト。必要なのは林業技術を学べる講座だが、青森県では少ないため、同協議会が率先して昨年第1回「実践的キコリ養成講座」を開催した。「ペレットの原料となる木材を、自伐林業方式で仕入れ、ペレットストーブやペレットボイラーの燃料として供給する。地域に必要な燃料を地域で作って出して供給する」エネルギー独立共和国「実現への活動を発信していきたい」

高橋理事長の呼びかけに呼応して講座を受講した二人一人が、自伐方式で間伐を進める——その輪が、年々広がっていく。

バイオマスエネルギーで 美しい青森を次の世代へ、**高**い志で**橋**わたし

特定非営利活動法人

青森バイオマスエネルギー推進協議会

〒033-0062 青森県三沢市新町2-31-2171 電話:0176-53-4175

<http://www.bioene.jp>

青森バイオマスエネルギー

検索



平川市 新合板

e・wood+
株式会社 今井産業



県産スギの間伐材やリンゴの剪定枝などを活用した波形ボード「e・wood+（イーウッドプラス）」。厚さ0.5ミリの薄板に波形状の連続曲げ加工を施した「青森県発」の新素材で、その最大の特徴である

「軽量」「丈夫さ」を生かした商品開発がいよいよ本格化の段階を迎えている。商品開発に取り組んでいるのは、「e・wood+パートナー会」。「木の段ボール」の将来性に魅力を感じる家電販売店、



東京で開かれた「e・wood+パートナー会」発会式の模様

イベント会社、商社など全国の中堅企業（全国販売規模会社）10社からなる。今年（2014年）3月に東京で同パートナー会の発会式が開催、7月には「e・wood+」を開発した（株）今井産業（今井公文社長）の地元平川市で2回目の会合が開かれた。

パートナー会について今井社長は、「今後の活動内容や、試作品を持ち寄って情報交換や業界状況をディスカッションする異業種の交流会です。2015年度からは各社が開発した商品をそれぞれのルートで販売し、素材のe・wood+を当社のモクテック工業と協力会社が製造し提供していきます」と話す。

10社との接点は、e・wood+の初お披露目となった東京のビックサイトで開かれた「産業交流展2012」への出展。軽くて丈夫で、波形の形状の面白さが企業関係者の関心を集めた。翌2013年にも今井社



「e・wood+」で作られた「猫の爪とぎ」(左)と「パーテーション」

長は「第8回国際雑貨EXPO」と「インテリア・ライフ・スタイル展」にも出展、産業交流展で面識を得ていた関係者たちがそこにも訪れ、共に「e・wo

全国の中堅企業10社がパートナー会 「e・wood+」で商品開発本格化

「e・wood+」のブランド化を目指す
パートナー会へと進展してい
く。

一方、2013年には、地域
資源である木を活用した新商
品開発の事業が、国の「地域産
業資源活用事業計画認定」を



素材が木だけに軽量、丈夫さが大きな特徴

受けた。再生可能な環境に優し
い「e・wood+」が、期待さ
れる新素材として国に認定さ
れたのである。さらに2014
年には、東経連ビジネスセン
ター（仙台市）が今井産業を、
マーケティング・知的財産事業
化支援事業に選定。弁護士な
ど専門家チームが契約先企業
との法的手続きや、波形ボ
ードを活用した商品開発のアドバ
イスを1年間にわたり支援す
ることになった。

「パートナー会10社からは今後
各企業の商品開発にもなっ
て、e・wood+に対する要
望がいろいろ出されてくるで
しょうから、現在の製造機を大
型量産化することにしていま
す。その資金源として、国の中
小企業ものづくり補助事業の
採択をすでに受けました」と今

井社長。

12年前、今井社長は上京し
た折りに段ボールで作った収
納ケースを目にし、「紙の箱」に
カルチャーショックを受けた。
紙なのに潰れないのは、段ボ
ールの「波形」に秘訣がある。その
波形を、木で作れないものか。
試作に取りかかり、薄板が高さ
6ミリの波形になって機械から
押し出されてくるまでに6年
かかった。

店舗什器、建材・内装材に活
用でき、波形の形状を生かした
照明器具や家具・雑貨用品な
どの試作も進んでいる。今井社
長は2015年には「e・wo
od+」の流通がスムーズにい
くよう新会社を立ち上げる計
画だ。紙の段ボール並みに、木
の段ボールを見かけけるよう
なる日も、近い。



自然のぬくもり暮らしの中に

株式会社 今井産業

本

社 ● 平川市新館藤山16-1

TEL.0172-44-2145 FAX.0172-44-2568

<http://www.nijiironomori.net>

弘前常設展示場 ● 弘前市泉野3丁目16-4

TEL.0172-55-0440 FAX.0172-55-0441

E-mail: llp-genki@clear.ocn.ne.jp

青森常設展示場 ● 青森市富田4丁目12-22

TEL.017-752-0981



青森市 薪・ストーブ

Wood rack
ウッドラック



煙突掃除のためハシゴをのぼる相馬代表

2階の屋根に立てかけた3連ハシゴを、ヘルメット姿の男性が慣れた足取りで上がっていく。Tシャツの背中に「煙突掃除人」の文字。薪ストーブショップ・ウッドラック(青森市)の相馬^{代表}だ。5年前の新築時にアメリカ製のバーモントキヤス

ティングスを取り付けたユーザー宅へ、毎年依頼を受けて秋口に煙突掃除に訪れている。相馬氏が、切妻屋根に立っている黒い煙突からトップを外し、ロープを使って屋根から降ろす。付着したススやタールを落とすのだ。強力な洗剤を吹き

付け、金タワシでこする。真っ黒になった汚れを水で洗い流しては、またこする。ピカピカの新品になる。そこまでざっと1時間。

煙突掃除というと、長いブラシを差し込んでゴシゴシやるだけのイメージが強いが、それだけではない。ストーブ本体もある。

煙突は安全に快適に使用するために、ストーブ本体は壊さず性能を落とさず長く使用するために清掃、点検、調整をする。

相馬氏が煙突、本体はスタッフの石村真弓さんが担当。2人掛かりで平均3時間もかかる。何年もメンテナンスがされていないストーブは5時間以上を要する場合も多々ある。だから2人掛かりでも1日せいぜい2件が限界。これを1年に80件こなす。

薪ストーブにはメンテナンスとアドバイスが不可欠なのが、付けっ放しで、メンテナンス



薪ストーブを安全で快適に使用するために掃除は不可欠

が伴わずに困っているケースが多い。そんなユーザーを相馬氏は「メンテナンス難民」と呼んでいる。実情をこう話す。

「今から10年以上前には、ストーブ本体までしっかりメンテナンスできる専門店が青森県内に存在しませんでした。設置業者も専門店ではなく、他に本業がある業者が知識のないまま片手間で取り扱っていたケースが多かったため、設置のし方に問題が多かった。ひどいものになると、煙突を上下逆さまに付けていたり、煙突やストーブ本体から可燃物までの離れが確保されていないかったり、煙突の長さ

薪ストーブの設置は専門業者に メンテナンスにこそ重きを置く



煙突のトップに付着したススやタールを入念に落とす



「煙突掃除は必要ない」なんて言っている業者もいるそうぞ、そんな話を聞くと怖くなります。火事になりますよ。

建築屋が見よう見真似で取り付けているというケースもあるが、薪ストーブに関しては素人だから、とんでもない間違いをやらかす危険性がある。設計事務所も、ただ安いという理由から他県の業者を選択している、というケースも。これらは、肝心のメンテナンスがついてこ

が規定よりも短いなど、実には危険。取扱説明もアドバイスも受けないまま使用しているのだから、ストーブの本来の性能を使い切れていないケースや、壊れたまま使用しているユーザーもたくさんいた。いい加減な設置例が増えるほど薪ストーブの評判が落ちるわけですよ。



薪ストーブにはプロのメンテナンスが必要

ないのだから、建築のプロとしては非常に無責任なことですよ」

プロが取り付けるからこそ安心。プロのメンテナンスが伴ってこそ快適。そう自負する全国の薪ストーブショップの「熱き面々」が、薪ストーブライフのさらなる安全・快適性の向上を目指そうと、毎年各地に参集し、勉強会を重ねている——と相馬代表は訴える。

薪ストーブと木の雑貨
Wood rack
ウッドラック

青森市自由ヶ丘1丁目2-13
TEL.017-752-0133 FAX.017-752-0134
E-mail : info@woodrack.jp



ウッドラック
オーナーズクラブマーク



薪ストーブ愛好会くくべる部

企業組合 県木住

企業組合県木住（佐藤時彦代表）のユーザーで組織する薪ストーブ愛好会「くくべる部」の「薪祭り」が9月（2014年）、青森空港のそばのくくべ

山で開かれた。自宅に薪ストーブを設置している13家族が参加、薪高積み選手権や薪丸太投げ、薪積みアート、丸太に輪投げ、の5種目に、パパの部、ママの部、お子さんの部に分かれて挑戦した。



13家族が参加して交流した「薪祭り」

空港の滑走路が見える曲がりカーブを過ぎて間もなく、右手に、薪が積まれた薪棚のわきに「くくべる部」の看板が立っている。ここが「くくべ山」だ。所有者は佐々木奥男（おくお）さんと、県木住で自宅を新築した際（2006年）、初めて体験したチェンソーによるスギの伐採に感動し、薪ストーブの薪を自ら調達しようとして空港そばの山林を取得した。佐々木さんを会長とする「くくべる部」が発足（2008年）して以来、くくべ山は会員た



「薪丸太投げ」(上)や「丸太に輪投げ」などに挑戦

ちの交流や活動の拠点となっている。

木の家には薪ストーブが似合う。板壁から太い煙突が立ち上がる外観は、県木住の家の特徴の一つだ。煙突から煙がたなびく、どこか懐かしい情緒に、むしろ新しさを覚える若い世代が「木の家」と「薪ストーブ」を受け入れるようになってきている。今回参加したMさんもJさんもOさんも……お子さんがまだ小さい若いご夫婦ばかりだ。

最初の競技は、積み上げた薪の高さを競う薪高積み選手権。いちはやく大人の背丈を超えて積み上げたものの、ぐらつき出して崩れ落ち、ああー、と天を仰ぐパパ。むしろお子さんのほうがすばやく立ち直って、崩れた薪を積み直していた姿にたくましさを見た。

次の、丸太投げも盛り上がった。パイナップルみたいなかたちに短く切った、直径40センチ、高さ40センチの丸太を放り投げて距離を競うものだが、重さは

親子で木に親しんだ「薪祭り」

薪丸太投げや輪投げに挑戦

なんと30キロ。「おとーさん、がんばれえー」とお嬢ちゃんの声援を受け、パパが地面に置いていてある丸太を、腰を入れて

持ち上げる。仕切りラインより後ろに下がったところから、丸太を前後に振りつつ勢いをつけ

て前進し、それつ、と放つ。3メートル、4メートル

……。唯一5メートル超えを果たしたUさんパパが優勝。丸太の重さを軽くして、ママたちも、お子さんたちも挑戦した。



「薪祭り」を満喫したユーザー家族の皆さん



昼食のカレーライスを薪ストーブで煮込む



薪積みアートから顔をのぞかせる子供たち

朝食はカレーライス。薪ストーブにのせてじっくりと煮込んだ鍋の蓋を取ると、腹の虫が鳴きそうな良い匂いが漂った。その隣の大きなアルミの鍋の中身は、ふっくらと焼き上がったご飯。「えっ、鍋でご飯が炊けるの？」とママの一人が眼鏡の奥の目を丸める。

列をつくってご飯にたっぷりとカレーをかけてもらい、会話を忘れて舌鼓を打った。 県木住の佐藤代表が開催趣旨をこう話す。

「自分の力で、冬の暖房エネルギーを作ろうとしているところに、くべる部の価値があると思います。今はエネルギーを買う時代になっていますが、昔の生活のように、暖房エネルギーを自分でつくる、という選択肢が復活してきました。くべる部の活動が、世の中に薪を浸透させていくささやかな力になればと願っています」

お子さんたちがせつせと運んだ薪を、パパやママが積み上げ、その中に絵を描いた薪積みアートの前で記念撮影。並んだ顔顔顔顔から弾けるように笑顔が咲いた。

薪ストーブ愛好会「くべる部」

〈事務局〉企業組合 県木住

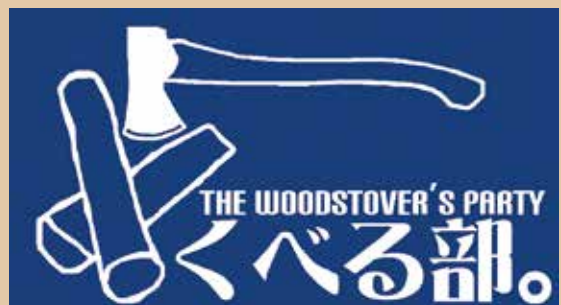
青森市松原1丁目16-25 青森県森林組合会館内2F・3F
TEL.017-732-5333 FAX.017-732-5777

<http://www.kenmokuju.com>

E-mail : info@kenmokuju.com

ブログ「くべる部」奮闘日記

<http://kuberube.jugem.jp/>



ソデカ杉探検

in

南八甲田

(関連3ページ 巻頭特集)

